



2010年9月14日、民主党代表選挙（以下代表選）が行われた。政党の代表選についてそれほど興味はないが、衆議院第一党の代表選であるから関心を持たざるを得ない。代表選の結果は、党員・サポーター票では菅総理137998票（249ポイント）で小沢氏90194票（51ポイント）、地方議員票では菅総理1360票（60ポイント）と小沢氏927票（40ポイント）、国会議員票は菅総理206票（412ポイント）で小沢氏200票（400ポイント）であった。党員・サポーター

民主党代表選挙と自民党総裁選挙

情報広報部

藤原 秀俊

民主党総裁選挙において、最大派閥の領袖で当初圧倒的に優位と言われていた橋本龍太郎氏は、「自民党をぶっ壊す」の小泉氏の地滑りの得票に敗れた。小泉氏は、一般党員の予備選で旋風を巻き起こし、その結果県連票123票（橋本氏15票）を得た。国会議員はこの結果から小泉氏の圧倒的有利と考え投票し、その結果小泉氏議員票175票（橋本氏140票）となった。この分かなりやすい構図により、以後小泉氏は戦後3番目となる長期政権を担うことになった。

言葉の軽い総理大臣が続いた。小泉総理は言葉自体軽かったが、良い意味でも悪い意味でも言動が一致していた。しかし

その後の総理はひどかった。国会運営に窮し辞任した安倍総理。次の福田総理は、「あなたとは違う」の迷言を残し去って行った。次の麻生総理は大変気の毒な総理であった。死に体の自民党起死回生の人事であったが、党内における支持母体の弱さとマスコミに足を引っ張られ、ダッチロールをしながらようやく着地（総選挙）を試みたが失敗した。

ターのポイント数では圧倒的な差がついたが、得票では地方議員と同様約6割を菅氏が占めた。総理を選ぶという民主党の代表選であったが、党員・サポーター・地方議員・国会議員の同時開票であったため、国民にとって盛り上がりに欠けた選挙であった。古い体質と言われた自民党でさえ、今回の民主党代表選挙より国民から見分かりやすく、盛り上げ方が一枚上手であった。

2001年えひめ丸事件で、国民の信頼を決定的に失った森首相退陣に伴い行われた自

してさらに不幸なことにそれに気づいていないことで、極めつけは「議員を辞めるのを、辞めた」ことだ。続いて総理になったのはエイズ問題で名をあげた菅氏だが、「イラ菅」やら「あき菅」やら言われている。9月16日、ようやく1年を迎えた民主党政権であるから、もう少し我慢強く見る必要があるかもしれない。某評論家は「政権交代は必要であった。しかし交代先は民主党ではなかった」と述べていたが、そうかもしれない。日本では1990年からの20年間で14人の総理大臣が変わったが、この辺で本格的な政治家による政権の誕生が望まれるところだ。

このような中、医師会はどうのような対応をすべきか？政権が代わって、かつての自民党一辺倒から当然のように変化をしている。医師会のトップである日本医師会は原中会長が民主党を推し、かつ太いパイプを持っている。また地方医師会には、自民党・民主党・みんなの党等に太いパイプがある。国会や民主党と同様に、医師会の支持政党においても中央と地方のねじれが生じている。しかし「いざ鎌倉」時には、一致団結して臨みたいものだ。そのためには、日医は医師会員（＝国民）に良く見える形で、政界や省庁と対峙していただきたい。不勉強の私には日医の対応が明確には見えてこない。